恋姫物語～神に恵まれし者～

暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋姫物語～神に恵まれし者～

【Ｎコード】
Ｎ３９１６Ｙ

【作者名】
暁

【あらすじ】
何気ない日常を過ごして居た主人公が突然なにもない真っ白な空間に立っていた
そして神様から告げられた事とは……

作者は初心者です？
駄文になるかもしれないですがよろしくお願いします

与えられし力は破滅を呼ぶか奇跡を呼ぶか（前書き）

初めて書きます。

至らぬ点もあると思いますがよろしくお願いします。

与えられし力は破滅を呼ぶか奇跡を呼ぶか

〈此処は何処だ……〉

周りを見渡すが辺り一面真っ白な空間ばかりだ

「えぇ～～と」

「たしか俺は部屋で寝ていはずたよな？」

よし行動を振り返ろう

〈まず高校から帰ってきて道場で稽古して飯食って少し運動して風呂に入って読書して普通に寝たよな〉

「うん…やっぱり訳がわからない」

しばらく考え込んでいると後ろに何か気配がしたので向いてみると……

そこには土下座をしている真っ白な服を着た老人がいた……

「えっと～どちら様ですか？」

《本当にすみませんでした～～～～～～～～》

「いや…いきなり謝られても困るんだが？」

《それもそうじゃな…とりあえず名乗ろうかの…儂は神様じゃ》

「はっ？」

《だから神様じゃと言っておろうが》

「何故に？そして此処はどこなんだ？」

《お主にやって貰いたい事があっての～そして此処は天界じゃ》

「天界？なにそれ俺死んだの？」

《まぁ～確かにお主には死んで貰ったんじゃが…だから謝ったのじゃ》

「勝手に殺すなよ～
まぁそうなったらしょうがないし
アフターケアちゃんとしてくれよ」

《その辺は大丈夫じゃこちらから呼び立ててしもうたからの
家族へのフォローはちゃんとするわい》

「それで俺に何して欲しいの？」

《実はのお主にはある外史の世界に行ってほしいのじゃ》

「外史っていくつもの世界が広がってるあれか？」

《そうじゃ、それにしてもお主よく知っておるの～》

「よく読書するからそんな感じの読んだことあるんだよね」

《そうか、なら話しが早いお主にはそこに行ってその外史を救って欲しいのじゃ》

「分かった、とりあえずどんな外史に行くんだ？」

《それはの……三国志の世界じゃ》

「えっ？危険真っ只中に行けと？」

《そこでじゃ、お主には儂の願いを聞いてもらうじゃから三国世界に行っても生き抜けるよう能力を授けようと思っての》

「それなら良かった～行っていきなり死んだら洒落にならん…所でそろ能力ってなんでもいいの？」

《まぁ大抵の事なら構わぬよ、無理なものもあるのじゃが》

「マジ？それじゃぁ

ＦａＴｅの全ての宝具でしょ～それとＢＬＥＡＣＨの斬魄刀全てと～ＮＡＲＵＴＯの世界に出てくる忍術全てで写輪眼とかのリスク無しで後は刀語の完全系変体刀全てとオリジナル作成可能にして欲しい」

《かなりのチートっぷりじゃの…》

「まぁこれでも漫画好きですから一度はやって見たいし、外史を救うにはこれくらいしないと何かあっても困るし」

《それもそうじゃな》

「所でその三国志の世界はどんな感じなの？」

《うむ、それはじゃな……有名武将が全て女性じゃ》

「えっ…マジすか？」

《マジじゃ、まぁお主なら何とかなるじゃろ》

「頑張ります！！それじゃ～しばらく此処で修業していいですかね？」

《それくらい構わぬよ、お主はまだ１６才くらいじゃからの２年くらで良いかの～？》

「うん、それくらいで良いかな。後流石に勉学は学びたいです」

《うむ、それくらい儂が教えよう》

「よろしくお願いします」

２年後……

えっ早過ぎるって？
気にしないでくだい
（笑）

「ふぅ～これくらいでいいかな～何とか能力使いこなしてきたし、知識も体鍛えたし頑張れるかな」《お主はやはりチートじゃ…たった２年で全て扱える様になったのじゃからな。知識も天才の域を越えたしの～まぁこれならあっちの世界に行っても大丈夫じゃろ》

「それじゃ、そろそろ行きますか」

《うむ、それでは頼んだぞ》

そしてまばゆい光に包まれ意識が沈んでいった

主人公設定（前書き）

こんな感じでいいかな～？

主人公設定

名前　暁紅（アカツキナイ）

容姿　るろ剣の抜刀斎の頃の感じ

身長　１７０？

体重　５５ｋｇ

性格　温厚かつお節介焼き

身体能力

ＦａＴｅの全ての宝具使用可能

ＢＬＥＡＣＨの全ての斬魄刀使用可能

ＮＡＲＵＴＯの全ての忍術使用可能

写輪眼とかのリスク無し

刀語の完全系変体刀全て使用可能

オリジナル作成可能

全ての武器は王の財宝＞ゲート・オブ・バビロン＜に収納している

自分の意識で手元に出すことが可能

忍術は印無しで発現可能

修業によってオリジナル忍術が使用可能

完全系変体刀も１２本の他、創り出した刀もある

２年の修業によりＦａＴｅ　ＮＡＲＵＴＯ　ＢＬＥＡＣＨ　刀語の能力は全て可能になっている

随時出していきたいです

紅、大地に立つ（前書き）

やっと出来た…

なかなか文章は難しいです。

ひとまず紅の能力確認です。

では、どうぞ…

紅、大地に立つ

管輅によるある予言が三国に広がる

「天を切り裂いて、天より飛来する二筋の流星は天の御遣いを乗せ、乱世を沈静す。一人は神々しい出で立ちをした者、もう一人は武と知が備わった強者が現る」

今の乱世にはこれ程とない天よりの予言

民たちは何時か現れるであろう二人の御遣いを待ち望んでいるのだ

それから数日……

此処はとある人里離れた森そこには一人の青年が倒れていた

そう…神様によってこの世界を救って欲しいと頼まれていた紅である。

「此処は……確か光に包まれたぐらいは覚えてるんだけど…辺りを見れば森だらけ……って事は三国の世界に着いたのかな」

「よし、取り合えず能力が発動するか確認するかな～来い『風死』……よし出来た。ついでに解号してみるか…刈れ『風死』……さて少し鍛練するか」

そう言って紅は『風死』を使い周りにある木々を切り倒していく…

「ふぅ～こんなとこかな～よし次は『火遁・頭刻苦』……あっ……やり過ぎた……消さなきゃ…『水遁・爆水衝波』……何とか消えたよ……（辺りを見回し）考えて使わないと……」

「さてお次は『約束された勝利の剣』…わっ…本当に見えないや～…じゃあ『千刀・ツルギ』…限定奥義・千刀巡り！！……わぁーお！？辺り一面刀だらけ……取り合えず一通り出来るみたいだな。」

そして全て王の財宝に戻した

「さて、能力の確認出来たし…そろそろこの外史の有名武将でも見て廻るかな…取り合えず…魏の曹操、呉の孫策、蜀の劉備？まだ義勇軍かな～後は洛陽の董卓か……よし行こう！」

「あっ…その前に森を元に戻さないと…『木遁秘術・樹界降誕』…威力抑えめにしないとデカすぎるからな……よし、これでよしと…」

辺りは先程までと違って何も無かったかの様に元の森に戻った…

そしてそれを確認し紅は旅に出た……

紅、大地に立つ（後書き）

やっと物語が始まるかな？

取り合えずそれぞれの武将にあってからにするかもです。

紅、無双し董卓軍に出会う（前書き）

やっと出来た……
無理くり詰め込みました…
戦闘描写がむずい…
駄文かもしれません…
チートします！！！
フラグします！！！
それではどうぞ…

紅、無双し董卓軍に出会う

「さて…どこから廻ろかな～取り合えず【反董卓連合】が組まれるはずだから董卓が暴君なのかどうか確認が必要だな、本当にそうなら倒さないといけないし、そうでなければ守らないと…」

「とにかく近くの村まで行ってみるかな～」

それからしばらくして……

「なんか知らんけど山賊ウザすぎね？
歩いていく先々で襲ってくるし…たまに頭に黄色い布被った奴らも居たな～まぁほとんど返り討ちにしたさ……と言ってもただ『千刀・ツルギ』で千刀巡りを発動させて斬って斬って斬りまくっただけだし…〜十分チートだよ☆〜……んっ？なんか聞こえた気がするんするんだか…まぁいいか……しまいにゃ…賊の一人に〈剣鬼〉って二つ名付けられたし……
お気に入りの『千刀・ツルギ』使ってりゃそうなるか…」

それもそのはず紅は賊に会うたんびに『千刀・ツルギ』出して千刀巡りをしているから当たり前なのである…

紅がそう言って落ち込んでいると村が見えてきた…

「おっ…村があるな少し寄って情報収集でもするかな…」

そして村に入り…一人の村人と話す

「すいません。ちょっと聞きたいことがあるんだけど…いいかな？」

村人「んっ？……おぉ～旅のお方かい？
よく来たな…それで聞きたい事とは？」

「ここ最近の噂かなんか聞かない？」

村人「噂か……そういえば陳留の方の曹操ってに何でも天の御遣いってのが現れたらしいぞ…何でも神々しい姿らしい…」

「天の御遣いね～なんか胡散臭いな……しかも神々しいときたか…
まぁおいおい確認するか…
所で洛陽の董卓ってどんな人物だい？」

村人「董卓様かい？あの娘は優しい子だよ…洛陽の民達はとても親しみを持っているらしいよ」

「そうなのか～近くだし一度会いに行ってみるかな…どうもありがとう…」

そして一息していると……

村人「賊が出たぞ～！！」

村人「黄色い布を巻いてる奴らいるぞ！！」

それを聞いて…

「賊は何人くらいなんだ？」

村人「ありゃ～ざっと見ても五万はいるぞ……旅のお方…早く逃げなさい……」

「取り合えず洛陽の董卓にこの事を伝えろ…誰か助けに来てもらえ…それまで時間稼ぎしてやるから」

村人「えっ？たった一人でか…死ぬ気か？」

「そんな分けないよ。これでも結構強い方でね…」

村人「分かった……あまり無理するなよ…」

そして村の入口に立ち…

「うぁ～壮観だね～一面賊だらけだ…まぁ時間稼ぎするとは言ったけど全部倒しても良いんだよな…」

「そうと決まれば今回は派手に『忍術』を打ち噛ますかな～殆ど刀だけだったし…たまにスッキリしないと…」

そして紅は賊達の前まで行く…

賊「なんだてめぇは？」

「なんだと言われてもお前らを殺しに来たんだか？」

賊「はっ…たった一人でこの数相手に出来るってか？舐めてんじゃねぇぞ！！」

「たった五万だろ？そんなの俺にとっちゃたいしたことないんだよな…」

賊「ならやれるもんならやってみやがれ！！」

「やれやれ…そんじゃ行きますか…『風遁・真空連波』…」

紅の口から複数のカマイタチが吹き出される…

ズバッ…ズバッ…ズバッ…

賊達は次々と斬られていく…

ギャァ……

賊「何が起きたんだ！！」

「ボケッとしてると死ぬぞ…『火遁・霞炎舞の術』…」

今度は口から霧状の物質を吐き火を噴いて一気に火の海に変える

ボォーーーーーッ

賊「ギャァーーーー」

「まだまだ～『水遁・破奔流』…」

紅の掌に水の渦を作り広範囲に及ぶ巨大な水の竜巻を出現させ的を巻き上げていく…

ゴォーーーーーーッ

賊「妖術使いだ～～逃げろ～～！！」

「妖術じゃないって…忍術だって……さてそろそろ終わらすか……水を浴びてるお前らは一瞬だ……『雷遁・偽暗』…」

両手から雷を高速で飛ばす…

ピカッ……ドゴォーーーーーーン

一瞬眩しい閃光になり収まると五万もいた賊が殆ど生き絶えていたのだ…

「ふぅ～片付いた……後で埋めないとな…」

紅がそんな事を言っていると前方から【張】と【呂】と【陳】と【華】の旗が見えた…

「おっ…援軍が来たのかな？張遼に呂布と陳宮、華雄か…有名武将が四人も…しかも本当に女の子だよ…」

紅に近付いて来て

張遼「ここの村に賊が来おったて聞いたんやけど…なんや片付いとるな～あんたがやったんか？」

「そうだけど…」

陳宮「嘘をつくなです…たった一人で五万も倒せるなんて出来るはずないです…」

華雄「確かにそうだな…恋ならともかくお前見たいな奴が倒せるはずがない…」

「いや…そう言われても実際倒したんだが……」

呂布「……この人強い……」

陳宮「なんですと！？恋殿より強いはずないです…恋殿が一番強いに決まっているのです」

張遼「あの恋が言ってるんやからそうなんやろ？」

華雄「まぁ…霞もそう言うならそうなんだろうな…」

「なぁあんた達がさっきから呼んでる名前は何なんだ？そっちの赤い髪の子は呂布だろ？それに袴着てるあんたは張遼だろ？」

張遼「なんやあんた真名知らんのかいな？」

「真名？聞いたことないな…今まで殆ど一人で旅をしていたしな…」

張遼「そうなんか…真名って言うのなぁその人の本当の名前で親と

か自分が認めた奴以外その名を呼ぶと首斬られるんや」

「神聖な名前って事ね……気をつけないと……」

張遼「まぁそう言うこっちゃ…そういえばあんたの名前なんて言うん？」

「俺は紅だ…たまに〈剣鬼〉とも呼ばれてるな…」

四人「……！！」

「どうしたんだ？」

張遼「……〈剣鬼〉ってあの〈剣鬼〉かいな？しかも真名まで…」

華雄「真名は神聖なものなのだが……しかもこんな奴があの〈剣鬼〉とはな…」

陳宮「たしか賊共は〈剣鬼〉に出会ったら逃げろと言っていたのです！」

「まぁ～そう呼ばれてるみたいだな……

確かに〈剣鬼〉とは俺のことだ…勝手に付けられたんだが……まぁ紅ってのが真名になるのかな？気にしないよ」

呂布「……恋」

「んっ？それって真名だろ？いいのか？」

呂布「……紅……いい人……それに強い…恋…闘ってみたい……」

「そっか～俺も賊を三万人たった一人で倒したその力に興味あるしな…

それじゃぁよろしくな……恋」ニコッ

恋「（ポッ）／／／／んっ……よろしく……／／／／」

陳宮「／／／／恋殿ずるいのです／／／／ちんきゅーも紹介するのです／／／／

姓は陳、名は宮、字は公台…真名は音々音なのです／／／／音々と呼ぶといいのです／／／／」

張遼「／／／／ならうちもやな……

姓は張、名は遼、字は文遠…真名は霞や…よろしゅうな～／／／／」

華雄「／／／／私は姓は華、名は雄だ…字は無い…真名は訳があって言えないのだ…済まない…／／／／」

「なに気にするな、よろしくな…音々音、霞、華雄」

なんと紅にはニコポが備わっていた！！

「そうだ！恋達の主に会いたいだがいいかな？」

霞「そやな…あの〈剣鬼〉が来たって聞いたら月っちびっくりするやろな～」

華雄「ならば戻るとするか…我が主の元へ…」

「その前に倒した賊を片付けたいんだけどいいかな？」

音々「片付けるってどうするのです？」

「まぁ～見てなって…『土遁・土流割』…」

ドゴォーーーン

賊共の亡き骸が在った場所の大地が真っ二つに割れ地中へと飲み込まれていく……

四人「……」

「ふぅ～これでよしっと……びっくりした？」

霞「何なん今の？いきなり大地が真っ二つに割れよったで？」

「今のは『土遁』って言うんだ…土を操るからね…他にも色々あるよ…それをすべて『忍術』って呼んでるんだ」

華雄「『忍…術』…？　妖術使いみたいなものか？」

「こっちで言う『仙術』かな？」

音々「おぉ～凄いのです！！」

恋「紅……カッコイイ……／／／」

「まっ…せっかく仲良くなれたんだし…　主の所に行ったら色々見せるよ」

霞「約束やで～ついでにうちとも勝負な～」

華雄「なら是非…私とも闘ってもらう…」

恋「…ダメ……恋が…先…」

音々「音々は見学なのです！！」

「あぁ～わかった…それじゃぁ行こうか」

そうして紅は董卓の元へと歩んで行くのである……

紅、無双し董卓軍に出会う（後書き）

次は董卓に会いに行くきます…

フラグ出るか！！！

チートするのか！！！

お楽しみに…

董卓に会い、紅は守ると誓う（前書き）

出来ました……

フラグ立ちます？

では、どうぞ…

董卓に会い、紅は守ると誓う

「此処が洛陽か…いい町だな～」

霞「そやろ～なんと言っても、月やからな～」

華雄「そうだぞ…董卓様は民達一人一人の事を大切にされているからな…」

音々「音々も月殿ために頑張っているのです！！」

恋「……月はいい子……恋が守る……」

「うん…董卓はいい家臣に恵まれているな～」

紅はそう言いながら音々の頭を撫でてあげるのだった…

音々「！！…恥ずかしいのです…でもなんか気持ちいいのです…／／／」

音々はうっとりしてしまった……

恋「…恋にもして……」

霞「うちにもして～な～」

華雄「私は別に……だが……してもいいぞ……」

「わかった…わかった…しょうがないな～」

そして三人を順番に頭を撫でる…

ナデナデ……ナデナデ

恋「／／／……んっ……ポカポカする……／／／」

霞「／／／なんや…これ癖になるわ～／／／」

華雄「／／／／／／／／」

「喜んで貰えて何よりだよ～さて……そろそろ董卓に会いに行こうか…」

そう言って紅は手を離す…

音々「もっと撫でて欲しいのです……」

恋「紅……もっと……」

霞「な～もうちょっとえ～やん～」

華雄「もう少し撫でて貰えないだろうか／／／」

「また今度な……」

霞「しゃ～ない…ほな行こうか…」

そして城に向かう…

霞「さっ……着いたで～～」

「うは～～～っ…でっかいな～～」

華雄「なんだ初めて見るのか……」

「そりゃね…殆ど野宿か村ぐらいしか行ってないしな…」

音々「野宿なのですか！？」

「野宿と言っても、術を使って家作ってるしな…」

霞「ほぇ～～なんか便利なんやな～」

恋「……恋……見てみたい……」

「ん～～此処じゃ出来ないからな～～」

恋「（シュン）……残念……」

「今度見せるよ…」

恋「……わかった……約束……」

華雄「飯とかはどうしていたんだ？」

「あぁ～それなら……（紅は空間から肉まんを取り出す）…って具合に食事には困らなかったんだ…」

恋以外「……！」

恋「……肉まん……おいしそう……（ジュル）」

霞「今…どっから取り出したん……？」

華雄「一体…どこから…？」

音々「それも忍…術と言うものなのですか？」

「おいおい…説明するよ……恋…食べるか…？」

恋「（コクコク）」

ハムハム……ゴキュン…

「（なにこの可愛い生き物…）…恋もっと食べるか？」

そう言って紅は１０個くらい肉まんを空間から取り出した…

恋「（コクコクコクコク）」

ハムハム…ハムハム…ハムハム……ゴキュン…

霞「恋は相変わらずの食っぷりやな～」

華雄「見ているこっちがお腹一杯になりそうだ…」

音々「恋殿～～」

「後で一杯あげるから…そろそろな？」

恋「……んっ」

そして謁見の間の扉前……

霞「それじゃ…紅は此処で待っとってな」

華雄「村の賊の報告とかの後で紹介するのでな…」

「わかったよ…待ってる」

霞「月～～詠～～戻ったで～」

華雄「董卓様ただ今戻りました…」

恋「ただいま……」

音々「ただいまなのです」

賈駆「！！……あんた達…大丈夫だったの！？」

董卓「へぅ～～心配してました～～」

霞「あぁ～～それな……うちらが着いた時にはもう片付いとったんや……」

賈駆「嘘！？……だって五万も居たのよ！！」

華雄「嘘ではない…本当だ……私達が着いた時にはたった一人の青年によって壊滅されていたのだ……」

董卓「一人って本当なんですか？」

霞「そやで～会ってみるか？二人ともびっくりするで？」

賈駆「えっ！！来てるの？」

華雄「あぁ……話し込んでいるうちに董卓様に会って見たいと言ってたのでな」

董卓「私に……ですか…」

霞「紅～～入っていいで～～」

そして扉が開き……

「お邪魔しま～す」

賈駆「ちょっとあんた！！五万の賊を一人で倒したって本当なの？」

「おぉ～いきなりだな……たしかに…一人で倒したぞ……所であん

たは？」

賈駆「嘘はついてなさそうね……私は賈駆…字は文和」

「あんたが賈駆か……って事は隣の子が……」

董卓「私が董卓です…字は仲頴と言います」

「（この子があの暴君！？そうは見えないな……）そうか…君が董卓か……俺は紅だ…賊からは〈剣鬼〉って呼ばれてる…」

二人「……！！」

賈駆「〈剣鬼〉って言えば会ったら最後……生きては帰れないって言う……」

董卓「〈剣鬼〉って言うから怖い人かと思っていました…」

「まぁ…襲われたりしたら返り討ちしてたらそうなった……」

賈駆「それなら納得するわ……一人で倒せるわね……」

董卓「村を守ってくれてありがとうございます」

「なに…礼を言われることじゃないさ…俺が助けたいと思っただけだ…」

董卓「それでもです…ありがとうございます」

賈駆「そうよ…私からも言うわ…ありがとう」

「（たしかに慕われるな…守ってあげたい…）」

董卓「よかったら真名を受けとって貰えますか？」

賈駆「そうね…あんたなら真名を預けてもいいかも」

「おいおい…いいのか…真名は神聖なんだろ？」

霞「月が言ってるやから…受けとったり～な」

音々「そうなのです！詠殿も預けると言うことは認められているのです！！」

「わかった…有り難く受け取るよ」

董卓「私は月と言います」

賈駆「私は詠よ」

「こちらこそよろしくな…月、詠…俺の事は紅でいいよ」ニコッ

二人「／／／／／／！！」

霞「あ～～二人ともやられたな…／／／／」

華雄「そうみたいだな／／／／」

音々「あの笑顔はドキッとするのです／／／／」

恋「……紅……／／／」

「それじゃ～しばらく客将として置いてくれないか？」

月「へぅ～～よろしくお願いします／／／」

詠「わ…私からもお願いするわ／／／」

紅はしばらく客将とるのである…

董卓に会い、紅は守ると誓う（後書き）

次は約束していた恋達との模擬戦にしたいと思います…

戦闘描写難しかもしれませんが…

オリジナル武将もだそうかなって思ってます。

紅、武を見せつつしかも洛陽の民に慕われる　【前編】（前書き）

書いてたら文字数足りなくなったので分けます…

オリキャラ登場します

ではどうぞ…

紅、武を見せつつしかも洛陽の民に慕われる【前編】

「さて…恋、霞、華雄…模擬戦しようか…」

恋「んっ……わかった……」

霞「おっ…待ってました～～」

華雄「ふむ、楽しみだな……」

音々「音々は見学するのです」

詠「ちょっと…あんた達…城を壊す気なの！！」

「あぁ～大丈夫、大丈夫…俺なら直せるから」

詠「直せるってどうやって？」

「まぁ見てたらわかるよ」

月「詠ちゃん…とにかく見に行ってみよ」

詠「月～～～もう…わかったわよ…」

そして演習場に向かう……

「さて……誰からにする？」

華雄「私から行かせてもらおうか……」

華雄は金剛爆斧を持ちながら構える……

「最初は華雄か…（力タイプっぽいな）じゃぁ…来い『絶刀・鉋』…」

一本の刀が現れる…

華雄「それも紅の力なのか？」

「あぁ…俺には『王の財宝』ってのがあってそこに幾つ物武器がしまってあるんだ…まぁ殆ど見えない空間にあるからね…それに食料も保存出来るよ、腐らないから便利なんだ…」

霞「だからあんな沢山…肉まん出てきたんか～」

恋「紅……肉まん…食べたい……（ジュル）」

「あ～恋…模擬戦の後沢山食べさせてあげるから」

恋「わかった…」

「よし…それじゃぁ…始めようか…」

霞「ほないくで…両者…構えっ…始め！！」

華雄「うぉぉぉぉぉっ」

華雄は物凄い勢いで金剛爆斧を振りかぶり一気に振り下ろす…

ガキン……

「さすが華雄だね……凄い力だ…」

紅は『絶刀・鉋』でそれを防ぐ…

華雄「なに！！……たかが細い刀で私の一撃を防いだだと……」

「この『絶刀・鉋』は頑丈さに主眼を置いててね…決して折れも曲がりもしない…次はこちらから行く！！」

紅は斬撃と突きで華雄を翻弄していく…

詠「凄い……あの華雄が一方的に押されてるなんて……」

霞「ほんまやで…あの斬撃と突きの速さ尋常じゃないで……」

恋「紅……やっぱり強い…楽しみ…」

音々「恋殿が喜んでるのです！」

ザンッ……ザンッ……シュッ……シュッ……

ガキン……ガキン……ガッ……ガッ……

華雄「くっ……防御するだけで手一杯だ……！！」

「さて…そろそろ終わりにするかな…行くぞ！！限定奥義「報復絶

刀」…」

紅は荒い突きを仕掛ける……

シュ…シュ…シュ…シュ…シュ…シュ…シュッ…

ガキ〜ン…

華雄「しまった……！」

華雄の斧が手から離れ無防備になり、紅は空中へ大跳躍し…

トンッ……

袈裟掛け斬りを仕掛ける…

「てぇりゃぁぁぁぁっ」

ドゴォ〜〜〜〜〜ン……

当たり一面に砂埃が舞う……

霞「ケホッケホッ……どうなったんや…」

砂埃が晴れそこにあったものは……

華雄の鎖骨辺りで刀を寸止めしている紅の姿があった……

華雄「……さすがだな……」

「いやいや…華雄もたいしたもんだよ…俺のあれだけの突きに対処出来てるんだしこれからも伸びるよ…」

華雄「そうか…ありがと……う」

華雄は気が抜けたのか紅の方に倒れ込んだ……

「おっと……お疲れさん」

霞「勝者……紅！！」

《うぉぉぉぉぉぉ》

いつの間にかギャラリーが増えていた…

「うぉっ…びっくりした～いつの間に集まったんだ？さて…華雄を休ませないと……」

そう言って紅は華雄をお姫様抱っこするのである……

霞「あぁ～ずるいで～～うちにもして～　！！」

恋「ずるい……恋も……」

音々「ずるいですぞ……ねねにもするのです！」

詠「なっ！！何してんのあんたは！！／／／」

月「へぅぅ～～／／／」

「いや……何をって…華雄を休ませないと……」

近くの芝生へと寝かせる……

「さて…次は霞かな……」

霞「よっしゃ！！うちもお姫様抱っこしてもらうで！！」

「いや…負ける前提をされても困るんだが…まぁ…その時はするよ」

一呼吸置き……

「さて…やろうか…」

霞「神速の張遼の腕前見せたるで～」

「（霞はスピードタイプか…）…来い『神槍』…さらに解号…射殺せ『神槍』…」

一本の脇差しが現れる…

霞「なんや…短い刀やな…そんなんでうちに勝てると思ってるん？」

「まぁ…見てなって…詠…頼む…」

詠「わかったわ…両者構え……始め！！」

霞「先手必勝やっ！！」

霞は飛龍偃月刀を物凄い速さで斬撃を放つ……

ザンッ…ザンッ…ザンッ…ザンッ…

しかし紅は紙一重でほぼ回避する…

「さすが…神速なだけあるな……すごいや」

霞「それを余裕でかわしてる紅の方がすごいんやけど……なんか落ち込むで…」

「いやいや…十分過ぎるほど速いよ…俺が特殊なだけだよ」

霞「でも…紅に褒められるんは嬉しいわ／／／」

「どういたしまして…それじゃ…俺も行くよ！！」

紅は『神槍』を胸の前で構える…

「……舞踏……」

ビュンッ……

霞「なっ！！……でも…こんくらい！！」

霞はいきなり伸びてきた『神槍』に驚いたが瞬時にかわす…

「流石だね…これならどうかな……舞踏連刃……」

ビュン…ビュン…ビュン…ビュン…ビュンッ

休む間もなく『神槍』が伸びてくる…

霞「くっ……一瞬でも気抜いたら…やられてまう……」

「流石…神速の張遼なだけはあるよ…かすりもしないんだもん……」

霞「ハァッ…ハァッ…ハァッ…これでも…結構…きついんやけど……」

「霞にこれじゃ勝てないか…来い『斬刀・鈍』…」

紅は『神槍』を消しすべてが真っ黒な刀を出した…

霞「紅はほんとおもろいやっちゃ…武器が色々出て…」

「でもこれで終わりだよ…一瞬で……零閃……」

シャリンッ……

霞の間合いに一瞬で入り峰で居合いする…

霞「うっ……」

ドサッ……

月「霞さん!?」

音々「霞殿!?」

「大丈夫だよ…峰打ちだから」

詠「……勝者……紅！！」

《うぉぉぉぉっ》

《すげぇぇぇっ》

「さて…約束通り運びますか…」

紅は霞をお姫様抱っこで運ぶ…

その途中……

霞「んっ……」

「おっ…目を覚ましたかい？」

霞「紅に運ばれてるって事は負けたんやな…やっぱ…凄いわ…」

「霞も鍛えれば大丈夫だよ」

「そっか…なかなかええもんやね…これ…／／／」

「喜んで貰えて何より…」

そして華雄の隣に降ろす…

霞「あんがとさん／／／」

華雄「んっ……ここは……」

霞「おっ…華雄…目…覚めたんか？」

華雄「あぁ…確か…負けた所までは覚えているのだか……」

霞「あの後、倒れて紅にお姫様だっこされたんやで？うらやましかったで～まぁ～うちも負けて運んでもろうたけど／／／」

華雄「なっ／／／（覚えてないのが悔しい！！）」

「華雄も霞もゆっくりしてなよ…最後の試合するからさ…」

華雄「わかった…次の一戦は見物だからな…紅……後で話があるんだがいいか？」

「あぁ…構わないよ」

霞「（華雄もとうとう言うんか…）うちも恋との試合が一番楽しみにしてたんや」

「じゃぁ…ご期待に応えないとね…」

紅は恋の居る方へ歩いて行く……

恋「紅……早く……」

音々「恋殿～頑張ってくだされ～」

「さて…恋を相手には最初から全開で行かないとな…」

恋「恋も…本気で行く……」

両者から物凄い闘気が溢れ出る……

ゴォ〜〜〜〜〜ッ

華雄「……ッ…これが二人の本気なのか……」

霞「……ッ……もの凄い闘気や……」

音々「恋殿…楽しそうなのです！！」

月「へぅ〜〜〜」

詠「……ッ…ちょっと！！あんた達周りを考えなさいよ！！」

そして二人の前にある武将が立つ…

？「あぶないでござるな〜」

？「まったくだ二人にはきついぞ…」

「あっ…ごめんごめん…恋と戦えると思うと……ね！？」

紅は月と詠の前に立っている武将を見て驚く…

そこには長身で腰まであろう緑色の髪をポニーテールにしている糸目の女性と長身で褐色肌の黒髪にこれまた腰まで伸びている女性が

居た…

「（なんで…ネギ魔キャラが居るの！？…俺が介入してるからか？）

……所で君達は？」

？「某は高順でござるよ…字は無いでござる」

？「私は徐晃…字は公明だよ」

気を取り直して…

「高順に徐晃か…君達も強そうだ…」

高順「やめとくでござるよ…」

徐晃「私もだ…勝てる気がしないよ…」

「そっか…残念…でもたまに鍛練の相手してね」ニコッ

高順「／／／」

徐晃「／／／これはまた…／／／」

「さて…恋…始めようか…」

恋「うん……」

詠「じゃぁいくわよ…両者構え…始め！！」

恋は方天画戟を振り抜く…

ゴォ〜〜〜ッと風が吹き荒れる…

紅はそれを避ける…

「さすが天下無敵の呂布だな…（恋は万能タイプか…）…じゃぁ…次はこっちから……『斬月』…」

紅は『斬月』で物凄い速さの斬撃を繰り出す…

ザンッ…ザンッ…ザンッ…ザンッ…ザンッ…ザンッ…ザンッ…

恋はそれを軽々と避ける…

恋「紅も…強い…恋…楽しい…」

そう言って方天画戟を次々と振り抜く…

ブォン…ブォン…ブォン…ブォン…ブォン…ブォン

紅も軽々と避ける…

周りがボロボロになっていく…

「これ以上は城が壊れるから一気に決めようか？」

恋「うん…行く！！」

「…卍解『天鎖斬月…』

そして二人は交差する…

ドサッ…

そこに立っていたのは紅だった…

詠「……ハッ！！…勝者…紅」

《うぉぉぉぉっ》

《呂布に勝ったぞ～》

「恋…大丈夫か？」

恋「大丈夫…紅…楽しかった……運んで／／／／」

「俺も楽しかったよ」

紅はそう言って恋をお姫様抱っこで華雄と霞の側に運んで降ろす…

辺りを見回し…

「さて…直しますか…」

詠「直すって…どうするのよ…」

「まぁ～見てなって……『土遁・地動核』…」

ボコッ…ボコッ…ボコッ

すると先程までボロボロだった演習場が元に戻る…

詠「あんたは一体…」

月「もしかして紅さんは…天の御遣い様ですか？」

全員「……！！」

続く……

紅、武を見せつつしかも洛陽の民に慕われる　【前編】（後書き）

次で董卓編を終わらして次の場所に行こうかと考えてます…

紅、武を見せつつしかも洛陽の民に慕われる【後編】（前書き）

何とか出来ました…

それでは…どうぞ…

紅、武を見せつつしかも洛陽の民に慕われる【後編】

「天の御遣いって一人じゃないの？陳留に現れたって聞いたことあるんだけど…」

月「天の御遣いは二人いるんです…一人は神々しい姿をした者…もう一人は武と知を備えた強者…」

「ってことは…その武と知を備えた強者が俺だと…」

華雄「それなら納得だな」

霞「そやね…うちらに勝つんやから」

恋「紅…恋より…強い…」

音々「紅は天の御遣いなのです」

詠「あの三人に勝つんだから納得よね…」

高順「天の御遣いでござるか」

徐晃「納得せざるおえないね」

「皆が言うならそうかもね…月を守るなら…うってつけの肩書だ…」

詠「月を守るって……あんた…なんか起きるって知ってるの！！」

「そうだな…皆には話しておこうか…まずは城に戻ろう…」

そして謁見の間……

「さて……詠は【反董卓連合】と聞いてどう思う？」

全員「……！！」

詠「……月に何か起きるのね…」

「あぁ…まず今起きてる黄色い布を着けた奴ら…黄巾党の件が片付いたら霊帝は崩御する……その後、十常侍にいいように利用され洛陽に圧政を引き悪い噂を立てられ袁紹と袁術の名声の為…討伐される…」

月「そ……そんな…」

詠「霊帝が崩御するだけじゃなく…月にそんな事が起きるなんて……」

霞「紅…何とかならへんのか？」

華雄「そうだ…月様を守る方法は無いのか？」

恋「月はいい子…恋…絶対守る」

音々「そうですぞ！！」

高順「そうでござるな～なんとかならんでござるか？」

徐晃「そうだね…守れるなら守りたい…」

「俺はそれを防ぐために此処に来たかったんだ…最初は知っている通りの人物なら始末する気だった…」

全員「えっ……！！」

「安心して…月に会ったらそんなこと思わなくなったから」

全員がホッとする…

霞「勘弁して欲しいわ～勝てへんも…」

華雄「そうだな…霞と恋の三人掛かりでも無理だろうな…」

恋「紅と戦いたくない…」

「そこでだ…皆を死なせたくないからある程度…洛陽を良い政策をして豊かにする…そして皆を鍛える…」

月「どうして…そこまでしてくれんですか…？」

「どうしてって…守りたい事に理由なんていらないからさ…俺が守りたいそれで十分だよ…」ニコッ

全員「／／／／！！」

月「へぅ～～ありがとございます／／／」

詠「ボクからもお礼を言うわ…ありがとう／／／」

霞「その笑顔は反則や…／／／」

恋「紅……／／／（ポッ）」

音々「そうなのです／／／」

高順「反則でござるよ／／／」

徐晃「反則だねぇ～／／／」

「そうだ！！華雄…なんか話あるんじゃなかった？」

華雄「……ハッ！／／／…そうだった／／／実は紅に真名を預けようと思ってな／／／」

「えっ！！なんか言えない訳があったんじゃないのか？」

華雄「実は…私は真名を伝える相手は伴侶になる相手と決めていたのだ／／／」

「今…なんと…？」

華雄「だから…伴侶になる相手と…何度も言わせないでくれ／／／」

「……そうなのか／／／」

華雄「預かってくれるか…／／／？」

「わかった…〈剣鬼〉と言われてるこんな俺でも良かったら／／／」

華雄「ありがとう…／／／私の真名は椿だ…／／／」

霞「やっぱり好きやったんか…うちも紅の事好きなんよ／／／」

恋「恋も……紅…好き／／／」

音々「ねねも好きですぞ／／／」

月「へぅ～～私も好きになってしまいました／／／」

詠「月も！？……ボクも好きになっちゃった／／／」

高順「某も惚れてしまったでござるよ／／／真名は楓でござる／／／」

徐晃「私もだ…／／／一目惚れってのはあるもんだね…／／／真名は百合だ／／／」

「みんな…ありがとう／／／」

そして数週間経っていく…

その間…紅は賊の退治や政務、武将達の鍛練をして、洛陽の民達との交流を深めていった…

その結果…

紅には新しい二つ名が出来た…〈天の術神〉…五大忍術を使ったりしたから当然である…賊に雷遁を使い「天の裁きだ～」とか…土遁や水遁、火遁、木遁など使い「神の怒りだ～」と言われたからである…

武将達は恋に匹敵する程までいかなくても強くなり…軍師組もかなり鍛えられた…さらに紅との間も深まった…

民達からは毎日と言っていい程…料理や贈り物など貰った…

その度に〈王の財宝〉にしまうのである…

子供達からの遊びにも付き合ったりした…

そして…

「皆に伝えたい事がある…そろそろ旅を再開しようと思う…」

全員「えっ！！」

「ちゃんとした理由があるんだ…もしもの為に月達の匿える場所を探そうと思ってね…それで他の場所に居る有名な武将を見に行こうと考えて……」

詠「それって誰なの…？」

「とりあえず気になるのが呉の孫策と…後は幽洲の公孫賛の所に居る義勇軍の劉備かな…陳留の曹操は天の御遣いが居るけど…どんな

もんか確認しに行くかも…」

月「わかりました…でも…気をつけて下さいね」

「大丈夫…ちゃんと会いに来るよ…一応此処の場所に術式掛けておいたから…何時でも来れるよ！」

霞「忍術やな！！」

椿「それなら寂しい想いをしなくて済むな…」

恋「恋…待ってる…」

音々「ねねも恋殿と待ってるのです！！」

楓「某も寂しいのは勘弁でござるからな…」

百合「あぁ…待つのは辛いからね…」

詠「ボクも月と一緒に待ってるから…」

「俺は幸せ者だね～こんなに沢山の嫁さんが居るんだから／／／」

全員「／／／／／／」

「それじゃぁ…行くよ…詠…十常侍には気をつけてな…」

詠「わかった…気をつけなさいよ…皆…あんたの事…心配なんだから／／／」

「わかった…ありがとう／／／」

そう言って紅は皆に接吻をするのであった…

そして…城を出る…

「さて…とりあえず…劉備の所に行ってみるか…『忍法・超獣偽画』…」

紅は墨の鳥に乗り劉備の元へと向かう…

紅、武を見せつつしかも洛陽の民に慕われる【後編】（後書き）

次は劉備の所です…

頑張ります！！

紅、仁君に会い…見極める【前編】（前書き）

二部に分けます。

出来は大丈夫だと思います。

では…どうぞ。

紅、仁君に会い…見極める【前編】

「ここら辺が幽洲かな…んっ？……なんか戦ってる感じだな…しかも一人って無茶しすぎじゃない？」

空から見ると一人の女武将が次々と黄巾党を倒して行くのが見える…

「ありゃりゃ…考え無しに突っ込んだなこりゃ…囲まれてやがる…一人でやるにも限度があるだろうに……ざっと二万五千ってとこか…さて…手助けしますか…」

そう言って紅は墨の鳥で敵のど真ん中で戦ってる武将の所まで行くのである……

？「くっ…雑魚と思い侮ったか…数が多過ぎる……だがこんな所では負けん！！」

武将は死体の山に囲まれ段々身動きが取れなくなり……更に疲労が出てきた……

が槍を使い…突き、薙ぎを繰り出し倒していく…

女武将「ハァ…ハァ…ハァ…（段々手の感覚が無くなってきたな…）」

黄巾党頭「たった一人の女相手になにやってんだ！取り囲んでなぶり殺しにしろっ！」

女武将「雑魚が粋がるな！！」

そう言ったその時…　血溜まりに足を滑らしてしまった…

黄巾党頭「今だ！！やっちまえ！！」

女武将「しまった！！（此処で終ってしまうのか…まだ忠義を誓う主も見つかっていないのに…）」

そして目をつぶってしまう…

すると…

「…『熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）』…」

七つの花弁が武将を覆い守る…

「…いただけないね～女の子相手に多勢に無勢とは…『突き穿つ死翔の槍（ゲイ・ボルグ）』…！！」

ドガァァン…

突然の声に全員が驚く…さらに攻撃しようとした黄巾党が一撃で大半が吹っ飛んだ…

女武将「なっ！！一体これは…」

「大丈夫かい？上から見てたけど一人でこんな人数の所に突っ込むなんて無茶にもほどがあるぞ…」

紅は墨の鳥に乗った状態で話かけた…

女武将「貴殿は一体…それにたった一撃でこれ程とは…」

黄巾党頭「なっ！！てめぇ一体誰だ！！」

墨の鳥から降りて…

「おまえらに名乗る程じゃないが〈剣鬼〉と言えばわかるかな？」

黄巾党頭「〈剣鬼〉だと！！」

その名を聞いた黄巾党共が慌てふためく…

女武将「…！！そうか…貴殿が今、噂になっている…」

黄巾党頭「くっ…だからどうした！！この人数には勝てるわけないだろうが！！」

「試してみるか…？　……所でそこの女の人…名前はなんて言うんだい？」

女武将「私は趙雲…字は子龍という…助太刀感謝する」

「いやいや…貴女が趙雲か…ぜひ手合わせしたいね！所で援軍来る予定あるの？」

趙雲「はい！！…一人で出て来てしまいましたが…客将として厄介になっている公孫賛殿…それにその知り合いと言う、劉備殿とお供二人に軍師が二人でしたかな…」

「そうか…まぁ倒してもいいかな…」

趙雲「倒すとは貴殿一人でですか！？」

「大丈夫！！〈剣鬼〉の名は伊達じゃ無いよ」

黄巾党頭「さっきから喋ってばかりいやがって！！なめてんじゃねぇ～ぞ！！おまえらやっちまえ！！」

そして一斉に襲い掛かってくる…

「はぁ…自分達の力量考えなよ…まずは…真名解放『王の財宝（ゲート・オブ・バビロン』…」

紅の後ろの空間から何百という武器が現れる…

「行け……」

すると…何百という武器が黄巾党共を目掛け降り注ぐ…

ズガガガガガガッ

《ぎゃぁぁぁぁぁっ》

《助けてくれ～～》

「…『壊れた幻想（ブロークン・ファンダムズ）』…」

すると…何百の武器が一斉に爆発する……

ドゴォォン…ドガァァン…ボゴォォン…

殆どの黄巾党はこれにより爆死していく…

趙雲は紅に見惚れていた…

趙雲「……（すごい…あれだけ居た数の黄巾党があっという間に半分とは…）……／／／」

「趙雲…もうそろそろ公孫賛達来るよな？」

趙雲「……ハッ…！！そうですな…間もなく来る頃かと…それと私の真名は星と言います／／／」

「…！！いいのか…いきなり真名を教えて…」

星「かまいませぬ…貴殿程…頼れる者はおりますまい…（と言うか…あなたには真名で呼ばれたい…／／／）」

「そっか…ありがとう／／／……星…俺の後ろに立っていて…一気に終わらせるから…」

星「わかりました…」

後方から砂塵が見える…援軍だ…

「さて…援軍も来たから一気に終わらせる…『串刺城塞(ガズィクル・ベイ)』…」

グサッ…グサッ…グサッ…グサッ…グサッ…グサッ…

《ぎゃぁぁぁぁっ》

黄巾党の足元に突然現れた槍により串刺しになり全滅した…

「ふぅ～また後で片付けないとな…」

星「さすがですな…あれだけの数を一人で倒してしまうとは…」

「まぁ～忍術使った方がもっと楽なんだけどね…」

星「忍…術とは？」

「後で教えるよ…迎えが来たようだよ…」

？・？「「星～～～」」

？「星ちゃ～～ん」

？「星お姉～ちゃ～ん」

？・？「「星さ～～～ん」」

星「これはまた…大勢で…白蓮殿に桃香様に愛紗に鈴々…それに…朱里に雛里か…」

白蓮「当たり前だろ！！いきなり一人で向かう奴がいるか！！」

桃香「そうだよ～心配したんだから～」

愛沙「そうだぞ！！星！！」

鈴々「ずるいのだ…星お姉ちゃん、一人で行くなんて…」

朱里「そうですよ～星さん…心配する身にもなってくだい！！」

雛里「…（コクコク）…」

星「それは済まなかった…危ないところをこのお方…いや…主に助けられてな」

全員「……！！」

「えっ！！主って俺？」

星「そうですぞ…私はあなたに惚れ込んでしまいましたから…女としても……／／／」

愛紗「所で星…お前が主と言うこちらの御仁はどなたなのだ？」

星「主はな…今、噂になっている〈剣鬼〉殿だ…たった一人で殆どの黄巾党を倒してしまったのだ…」

全員「…！！」

「ご紹介に預かった〈剣鬼〉こと紅だ…真名は無い…よろしくな」

白蓮「そうか…お前が今…噂の〈剣鬼〉か…星を助けてくれくれてありがとう…私は公孫賛…字は伯珪…真名は白蓮って呼んでくれ」

桃香「ほえ～～あなたが〈剣鬼〉って言われてる人なんだ～怖い人だと思ってた～私は劉備…字は玄徳…真名は桃香だよ～」

愛紗「貴殿が…あの…しかもたった一人でとは……私は関羽…字は雲長…真名は愛紗です」

鈴々「お兄ちゃん…強そうなのだ～鈴々は張飛…字は翼徳…真名は鈴々なのだ」

朱里「はわわ…あなたが〈剣鬼〉と言われてるのでしゅか…二万五千人を一人ででしゅか…すごいのでしゅ…はわわ…噛んじゃいまちた～」

雛里「あわわ…でも…優しそうな人でしゅ…あう～噛んじゃいまちた…」

「噛み噛み和む～」

ナデナデ…

朱・雛「はわわ（あわわ）／／／」

「あっごめんね…」

手を離す…

朱・雛「あっ……」

二人は残念そうに言う…

「所で皆…真名…いいのか？」

星「なにをおっしゃいますか…」

白蓮「そうだぞ…星が認めているからな…」

桃香「そうだよ～ねっ皆？」

愛・鈴・朱・雛「はい（なのだ～）（（でしゅ））」

「そっか…ありがとう／／／」ニコッ

全員「／／／！！」

「さて…倒した黄巾党を片付けますか…『流砂瀑流』…」

ゴゴゴゴォォォ…

黄巾党共は流砂に飲み込まれていった…

全員「えっ！！」

「やっぱり…びっくりするよな～恋達も最初は驚いてたもんな～」

星「……むっ……主～他の女子の名を呼ぶとはどういうことですかな～」

「後で説明するよ…とりあえず白蓮達の城に行こう」

紅は…城へ赴く…

続く…

紅、仁君に会い…見極める【前編】（後書き）

五、六人を一辺にだすと書くの大変…

でもそうしないと次に進めないからな～

難しいとこです。

紅…仁君に会い…見極める【後編】（前書き）

やっと更新できました。

年も明けましたこれからもよろしくお願いします。

それではどうぞ

紅…仁君に会い…見極める【後編】

城に着き…

「ふぅ～着いたね～」

星「さて…主…先程の女子の事と先程の妖術見たいな物を説明してもらえますかな…」

全員「…（コクコク）…」

「簡単に言うと星達に会う前に他の場所で客将してたんだよ…その時真名も教えて貰ったんだよ…あとさっきのは妖術じゃなくて忍術ね…まぁこっちでは仙術と言えばいいかな…聞いたこと無い？〈天の術神〉って…」

星「なんと…！！そうでしたか…もう一つの名も主でしたか…それと…私も主の嫁になれますかな…」

全員「…！？」

「…！！なぜ…嫁さんが居るとわかったんだ？」

星「女の勘ですかな…」

「流石だね…確かに嫁さんは居るよ…7人くらいね。こんな俺でもいいと言ってくれたからな…」

星「7人もですか！！主は恵まれているのですな～」

「まぁね～元々、会いに行く予定だったからそれで客将をやってる内に仲良くなったのさ」

星「なら主と仲良くしなければ／／」

「まぁ～しばらく白蓮の所で客将するよ」

白蓮「えっ！！本当か！！助かるよ～」

鈴々「やったのだ～お兄ちゃんと勝負出来るのだ～」

愛紗「私も手合わせをしたいですね」

桃香「紅さんは何処かに留まる事はしないの？」

「とりあえず今はそれを探すのも兼ねて旅をしてるからね…そうだ…桃香はどうして義勇軍を立ち上げたんだい？（月達を匿えるか見極めないとな…）」

桃香「私は誰もが笑って暮らせる世の中にしたくて義勇軍を立ち上げました…」

「（甘いな…）誰もが笑って暮らせる世の中ね……それは難しいね……」

全員「…！！」

愛紗「それはなぜですか！！」

「桃香の言ってる誰もがってのは敵も入っているんだろう？…敵が笑えば民は泣くぞ？」

桃香「…！！」

「桃香の言っている理想は否定しない…むしろその方がいいだろう…だが…話し合いで済まない敵がいることも覚えておくといい…」

桃香「…わかりました…」

「まっ…桃香の事は期待してるんだ…頑張れよ」ニコッ

桃香以外「／／／／／」

桃香「／／／……はい！！頑張ります／／／」

「さて…取り合えず仕事しますか…」

白蓮「そうだな～紅は何が出来るんだ？」

「政務とか調練とか一通り出来るぞ？前の所でもやってたから…」

白蓮「本当か！！助かるよ～」

星「なら我々は手合わせをお願いしますかな…」

「そうだな…先に白蓮を手伝ってからな？」

白蓮「ありがとう／／／」

「どういたしまして」ニコッ

桃・朱・雛「私（達）も手伝(いましゅ)うよ～／／／」

「じゃぁ頑張りますか…」

それから…紅は政務と星達と手合わせをするのである…

それから数ヶ月…

星達は紅の手合わせもあり実力を霞達ぐらいまで強くした…紅が言うには「今の恋と戦うには霞並まで引き上げないと虎牢関で瞬殺される」だそうだ…

政務の方は白蓮達を詠達ぐらいまで鍛えた…

それから桃香達とも恋仲になったのである…

なぜか…星や白蓮、鈴々以外にご主人様とよばれてしまった…

そして…数日後

「さて…そろそろ旅を再開するかな…」

全員「……！！」

「そんなに落ち込まないでよ…」

桃香「だってせっかく仲良くなれたのに…」

愛紗「そうです！！ご主人様」

「最初から客将だって言ったしね…それに会いたい人物いるしね…」

朱里「ご主人様？会いたい人物とは誰なんでしゅか？はわわ…かんじゃいまちた…」

「（可愛い…お持ち帰りしたい…）…曹操と孫策かな…」

桃香「最近…曹操さんの所に天の御使いさんが現れたらしいね…」

「それもあるから見に行こうと思ってね…後、江東の小覇王も見てみたいし…」

桃香「そっか…また会えるよね？」

「当たり前だよ…嫁さんは大事にしないとね…」

全員「／／／／／／」

そう言って紅はみんなに接吻をするのである…

「それじゃぁ行くよ…桃香もちゃんと自分の軍作るんだよ？白蓮はしっかりね…愛紗達も桃香を頼んだよ」

全員「はい／／／／」

そうして紅は旅を再開するのである……

紅…仁君に会い…見極める【後編】（後書き）

次は三羽鴉と覇王に会おうと思います…さらに北郷が現れます…空気になるかも…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3916y/

恋姫物語～神に恵まれし者～

2012年1月12日23時58分発行